高松大学紀要，42．9～26

生贄の系譜的類型
－アステカの生贄を中心にして－

高　重　　進

Genelogical typology of human sacrifices
— in connection with Aztec sacrifices —

Susumu Takashige

Abstract

The conception that the offerers have of the recipient helps determine the form of practise, therefore ritual slaughtering may be play a part of the sacrifice offerers, but whom does not believe it, the action may be regard as a killing.

Most of the materials could be available through the both conceptive processes : some early chronicles expressed in the Nahuatl (or Aztec) language, old books of painting hieroglyphic inscriptions, reports of oral tradition submitted by the priest to the bishop and the Emperor, even if all their materials are translated editions. Therefore their is abundant imformations available that allow the delve into the manner and the method of the remarkable sacrifices from the both point of view.

The aim of this paper is to clarify, how Aztec people came to have their Aztec type of sacrifice, and what method were used in the practises, and finally to attempt to classify it under what category does their practise belong in the worldwide typology.

The results can be summerized as follows.

(1) many human sacrifices in Aztecs are usually considered to originate from ancient times, but the formal practise pattern in flourish stage are that : priest slit open the chest, and take out his heart form it, then tumble down from the top of the ladder at the sanctuary.

(2) The man who had philosophically justified and fixed as its formal sacrificial actions, was Tlacaelel, played an important role in its spiritual unification and solidarity of the Aztec society as a cosmogorist.

(3) The author have made clear priviously the two categories in the worldwide point of view ; holecaust type and burial type, Celts and India the former, China and Japan the latter. The Aztecs can be considered of the third category, blood type.

key words : human sacrifice, holocaust type, burial type, blood type, Nohuatl, Tlacaelel.

はじめに

生贄は信ずるものにとっては意義ある行為であるが，信じないものにとっては殺人である。次の口伝は，1323年頃，勢力を誇っていたクルワカンのトルテカ族の女を妻とすることによってアステカが友好関係を計っていこうとしていた時期の事例である。[1]

トルテカ族の１つクルワカン族の新王アチトメトルが，その娘をヤオシワトル（女戦士）神にするため譲ってもらえないかとアステカ族から申し出を受けた。口伝では，「それを恐れのためか，あるいは本当に娘がアステカ族の生き神になると思ったのか，聞き入れた。[2]」しかし，守護神ウィツィロポチトリは連れてきた乙女をすぐ生贄にするよう命じ，１人の神官が生贄から剥いだ皮を身にまとい，ヤオシワトルになりすまし，新しい神を崇拝するために，新王アチトメトルに儀式を行った。アチトメトルは最初は香のせいで気づかなかったが，生き神になりすました人物の前で生贄の儀式が進行し，鶉の首が切られ，香の煙が消えてしまうや，自分の娘が殺されたことに気づき，恐怖の叫び声をあげ，戦いが始まったいきさつが語られている。[3] 総合的に考えてトルテカ族はアステカに比べ生贄へ馴染みがうすいと考えられるからである。

次に生贄が行われている時点で記録でさえ信じないものは，さめた記述になっている事例をあげておこう。何よりも生贄が取上げられる意味は，史料が現実のものとして語られているところにある。例えば，シエサ・デ・レオン『インカ帝国史』付録として抜粋翻訳され収録されている『ペルー誌　第一部』初版1553年セビリヤ版所収の「四，パチャカマの川の流域と，そこにあったひじょうに古い神殿のこと，およびそれがユンガスの人たちに崇敬されていたこと」では，クスコの神殿（太陽神殿）のほかにたくさん神殿をつくったが，そのどれも，ここにあるパチャカマの神殿におよぶものがなかったといわれる神殿で，「その神官たちが大勢の群衆の前で生贄を捧げるとき，彼らは顔を神殿の扉の方に向け，偶像を背にして，視線を下にそそぎ，からだ中をひどくふるわせた。今日でも生きているあるインディオたちの公言するところによると，その錯乱の状態はたいへんなものであり，異教徒たちが嘘の返答を待っているときのアポロの神官たちについて記されるところと比べることができるであろう。[4]」と。同様のことは現在のカニエテ川（当時ルナグァナ）のチンチャの流域およびカマイという場所で絶えず生贄を捧げると年とった人々は云うていた。[5] と。

また，『インカ帝国』のシエサ・デ・レオンと『ヌエバ・エスパーニャ布教史』のモトリニーアと『フィレンツェの絵文書』のベルナルディノ・デ・サァグン師とを比べると，

史料として最も信憑性の高いものはサァグン師のそれである。シエサ・デ・レオンは氏自身も述べているように，インカが生贄の少いということにもよるが，具体性に乏しく，生贄を捧げるという記載にとどまっている他に，「彼らの慣習としておこなったことについてのはなしは，私はここに記したくない。異教のことだからである。[6]」ところにある。

以下は，上述の前提のもとに，前稿「ケルト民族と日本民族との類同性に関する一考察—イキニエをめぐる予察—」[7]でふれることができなかった中南米，特にアステカを中心にして，ヨーロッパ・アジアの延長上にあるとみることができる生贄について，その様態をもとに位置づけることを目的としたものである。

1．祭祀と生贄

最初にアステカを中心に生贄がどのように行われていたかを，現地のナワトル語からの直接及び間接の訳により取出してみていきたい。[8] 史料及び文献は特にことわらない限り以下のものによった。(1)フランシスコ会士，モトリニーアの見聞・観察内容・調査結果を上司の命により布教活動を中心に編纂した『ヌエバ・エスパーニャ布教史』，(2)フランシスコ会士，サァグンの指導で現地ナワトル語でまとめられた『フィレンツェの絵文書』の征服物語の第一二の書，(3)未詳の著者によって，アステカ民族の起源から征服されるまでの歴史をメヒコ陥落後わずか７年でアルファベッドを用いてナワトル語で編纂された『トラテロルコ編年史』，(4)ドミニコ会士　ディエゴ，ドウランの『ヌエバ・エスパーニャのインディアス史』である。

なお，上述の史料を用いた著書・文献の場合もその都度出典を明示した。

(1) ヘプドマダの新年の祝祭と生贄[9]

アステカでは１年は365日としていたが，１か月は20日であったり独特のものが用いられていた。メキシコでは52年目の最終日と新しいオリンピアドの最初の年の初日には特別の祝いの行事が行われた。最後の年の最後の日と新しいオリンピアドの最初の日に行われる儀式は格別のものである。夕方神殿の火から一般の住民の家々の火まで一斉に消される。新しいヘプドマダの１年が始まる真夜中になると山頂の神殿で火の木と呼ばれるある種の木から新しい火を作り出し，この火を松明に移し，メキシコ市の一番重要な神殿に運び偶像の立ち並ぶ前に火が点ぜられると戦争で捕虜になった者を１人連れてきて，これを新しい火の前で生贄として屠る。犠牲者の心臓が取出され，流れ出る血は神官によって聖水の

ように新しい火の上に振り掛けられる。これが終ると町・村からやってきた人々がそれぞれ自分たちの所の神殿に新しい火を運んでいく。このためにメキシコ市だけで400人の人間が生贄として捧げられる。

(2) パンケツァリストリの祭の生贄[10]

第14番目の月の祭のことで，メキシコ市の兄弟神，テスカトリポーカとウィツィロポチトリーを祭る。戦争の神である。敵に打勝ち，これを支配するという力を備えていた関係で盛大に行われ，耳や舌から血を流す通常の犠牲行為が多く行われたが，プロビンシア毎に異るので，腕とか胸など身体の別の部分から血を出したり，自分の身体からの少量の血を神像に振り掛けたりして神に捧げられた。

以上の他，次の方法で行われる生贄を伴う儀式があった。石段を上りつめたところの神像を祀った祭壇の前に1.7m×0.3m，厚さ0.2mの長石が置かれ，その上に生贄に捧げられる者が手足を縛られ，仰向けに寝かされ，生贄の儀式は大神官またはその代理によって執行される。石刀を手にした儀式の執行者が満身の力を込めて仰向けに寝かされた犠牲者の胸を切り開き素早く心臓を取出す。次に取出した心臓を神殿の入口の上にある楣(まぐさ)石の外側に向けて投げつけ，そこに血の跡をつける。落ちてくる心臓は地上でまだ少しピクピクしているが，その後すぐに祭壇の前に置かれた碗形の容器に入れられる。他の容器に血を溜め，主神の像の唇にぬりつけることもあれば，心臓を取出すとこれを太陽に向けて高く差上げることもある。また，心臓を老神官たちが食べてしまう場合もあるし，地中に埋めることもある。心臓を抜取られた犠牲者の身体は人の手によって石段の上から投出され落ちて行くが，下に落ちた死体は戦争捕虜であれば，彼を捕えた者が自分の友人・親戚の者たちで運び去る。ほかの食物と一緒にその肉を料理して翌日宴会を開き食べる。その際捕虜を捕えた本人に財力があれば，招待客に引出物として織物を贈る。犠牲者が奴隷であれば，死体は投出され人々の腕に抱えられて下におろされる。生贄にされる人数は場所によって，20名から多い場合は60名にもなり，メキシコ市でも100名からそれ以上にもなった。犠牲者の死体の中には，いくつかは皮を剥ぎ取られることもあった。その皮を着て踊ることがあったが，メキシコ市以外ではみることができなかったから，メキシコの場合モテクソーマの支配であったからであろう。

(3) 火の神・水の神の祭と生贄[11]

火の神は大事な神であったから，国中どこに行っても同じであり，祭の日が決っていた。モトリニーアはクアウティトランの例をあげている。祭の日には戦争捕虜の１人を引出し，

火の神の装束をつけさせ，神に仕立てた者を崇めるために踊った後，この１人を生贄として，あとの捕虜全員をも生贄にした。前日には神殿の石段を昇りつめたところにある神像を祭った祭壇の前で２人の女の奴隷がまず喉を掻き切られ，その場で身体全部と顔面の皮を剥ぎ取られ，太股から骨を抜き取られる。祭の当日朝，２人の要人が剥取った皮を身に付け，顔面の皮を仮面のようにして被り，太股の骨を両手に，それぞれもってゆっくりと石段を野獣のような唸り声を発して降りてくる。下の広場では，われらの神がやってきたと云う。下では前もって生贄にされた鶉が投げられ地面をおおいつくす。8000羽を超える鶉が正午になると集められて神官・支配者・要人の間に配られる。同じ祭にはもう１つの生贄が捧げられる。前夜のうちに立てられた６本の丸太棒の先端に６人の戦争捕虜が十字架のように括りつけられる。その周囲を取囲む2000人以上の若者や壮丁が手に弓矢を持って集まり，括った捕虜に一斉に矢を放つ。捕虜たちが半死半生になると丸太棒に登って縛ってある紐を解く。捕虜はまっさかさまに墜落し，身体中の骨がバラバラに砕ける。その後，生贄として心臓を抜き取られる。死体は別の場所に引きづって行かれ，そこで喉を切り開かれ，首が斬り落され，首は神官に渡される。身体は首長や要人の宴のためにとっておかれる。

水の神の場合は世界のどこの国でも，またいつの時代にも見られる豊穣祈願の性格が強い。年に一度玉蜀黍が20cm位に成長すると，有力な首長のいる町では３，４才位までの子供男女１人づつが生贄に捧げられる慣習があった。生贄となる子供は奴隷ではなく，要人の子弟であることに特徴がある。儀式は水の神と呼んでいる神像の祀られた山で執行される。水の神は雨をもたらしてくれる神で，この祭は一種の雨乞いに当る。生贄となる２人の子供は心臓を取出すことはしなかったが，代りに喉を掻き切り，死体を布地に包んで，石棺に似た石の箱に納め捧げ物として置かれた。

同じ日，メキシコ市では同様の水の神への生贄として，小舟に幼い子供男女１人ずつを乗せて湖の真中へ漕ぎ出し，小舟もろとも沈めて生贄にささげるということもなされた。さらに人々がお互に費用を出し合って５・６才の子供の奴隷を４人買って，水の神へ捧げ，死体を洞穴の中に入れて，翌年同じ儀式を行う時まで閉めてしまう習慣もあった。これはかつて４年間降雨がなく，緑が消えてしまった時，水の神の怒りを鎮めるための祈願としてはじめられたという。

(4) 商人の塩の女神への生贄 [12]

それぞれのプロビンシアの商人は，自分たちの祭りをもっていたが，また，塩の女神の

祭りをももっていた。塩の女神の祭りでは，各地の首長や要人が一番大きな町へ全員集まって踊った。彼らは塩の女神の装束を着て，一晩中踊り明かすが，夜の明ける頃か9時頃になると，この塩の女神に生贄を捧げた。また，首長や要人が山の中にある神殿で，生贄を捧げるために，狩人たちが，ライオンや虎やコジョトル・鹿・野兎・穴兎・鶉・蛇・蝶などの動物・昆虫・鳥を捕え，首長のところへもって行き，首長はこれに見合った品物を与えた。他にも各プロビンシアに沢山の祭りがあるが，いずれも生贄を捧げたり，断食が行なわれた。生贄は戦いの場で捕虜となった者である。

(5) トラスカーラの町の大祭[13]

毎年3月に祭があり，4年目ごとに大祭が行われる。トラスカーラ・ウェホシンゴ・チョルーラの三国の中の最長老の神官トラマカスケが中心となって執行われた。神官の中の老神官だけは，途中から総勢200名を残して4～5名の同行者だけで，マリンチェにある水の神の神殿マトラルクェージェがある山頂へ出向いて，沢山の紙とコパーリと鶉とを捧げ，無事断食ができるよう祈った。その後舌の穴に棒を通すことと160日の断食が行われる。前夜になると食物が供えられ，また，偶像の前には兎・鶉・蛇・蝗・蝶が供えられ，その場で生贄に捧げられた。真夜中になると新しい火が点され，祭りのために残されていたもっとも身分の高い人物の1人が生贄に捧げられた。この時に殺される者は太陽の子と呼ばれた。その後戦争捕虜を生贄に捧げる儀式が行われ，その他の他の神々の名を呼んでこれにも生贄が捧げられた。町や村の大きさに見合った生贄が，例えば，405人，50～60人と殺された。トラスカーラの町と国だけで800人にも上った。死体はそれぞれの生贄をつれてきた人々のもとへ引渡され，一部は神官に残された。

ウェホシンゴ，テペジャカク，サカトランの3つのプロビンシアでも大きな偶像カマストリを主神にしているので大祭のあり方は同じであるが生贄とする数はトラスカーラより少ないということであるから，上述以外のプロビンシアでもほぼ同様であったものと思われる。ただ，水の神への子供の生贄の数ではトラスカーラの国が他の追随を許さないことが指摘されている。その他では，高い十字架の上に生贄を縛りつけ，矢を射て殺す場合，低い所に縛りつけ樫の棒で突き殺すやり方があること，同じトラスカーラの祭りの中に，生贄として2人の女を殺してから，皮を剥ぎ取り，神官がその皮を着て，盛装の首長・要人を追かける儀式があることが報告されている。

(6) 女神トシの祝祭と生贄[14]

新しい居住地を求めてやって来，居つくためにメシーカ人がコルワカンの王の娘を自分

達の神と結婚させようとして殺し，皮を剥ぎ，人形(ひとかた)は神として祀ったことによりコルワカ人とメシーカ人との間に戦が起ったが，メシーカ人はこの女神を神々の母として毎年盛大な祭祀を行ってきた。メシーカ人にとって大事な祭であるのでモテクソーマ王はこの機会に生贄にしようと，トラスカラの捕虜を集めさせた。捕虜の一部は通常の儀式に従って，短刀で生贄に処せられた。通常の儀式とは，胸を切り開き，心臓を剔出し，犠牲を神殿の階段のてっぺんから転がり落すことであった。もう1つのグループは，火の生贄といわれ，神の火刑台で焼き，炎の責め苦を味あわせた後，燠(おき)のなかから，ピクピクしている瀕死の身体を引っ張り出して胸を切り開き，心臓を剔出されるものであった。第3のその他の捕虜は女神の神殿に連れて行かれ，近くの大きながっしりとした厚板でできた足場の上の台座の，女神の像の安置されている神殿で串刺しにされ，弓矢で刺しつらぬかれる生贄にされた。

(7) 部分犠牲または自己犠牲[15]

ここでは祭祀に関係はあるがいわゆる通常の生贄には含ませず，苦行のカテゴリーに入るものについてみることとする。それを広義の生贄とみる理由は，例えば，大祭に伴う断食においても，神像の前で交替で行う不寝番を伴うもので，彼らは悪魔（アステカの神のこと）のために多くの歌を歌い，時おり自分のいろいろな箇所から血を流してはこれを悪魔に供えるという犠牲行為を行ったとのべているからである。断食もわが国の断食とはやや異なる。

部分犠牲についてはAlfred BloomのThe Encyclopedia of Religionの“Sacrifice”の項において用いてある“part-for-the whole”の意訳である。[16]

テワカン・クスカトラン・テゥティトランでは神官が犠牲の意味を込めて，瀉血を行うことが述べられている。瀉血は耳・舌や身体の各部からなされ，神に捧げられた。また，断食も神に捧げられる苦行であった。断食者の修業振りや彼らの見る幻覚のことを知ってアステカの国王であり大首長であったモテクソーマは神々がこうしたことをことのほか喜んでくれるものと信じていたとモトリニーアは『ヌエバ・エスパーニャ布教史』でのべている。[17] キリスト教の割礼に当る行為と考えたに違いない。生贄というよりも苦行の中に入るべきものではある。4年の断食修行期間中に女性と同衾したことが露顕した場合には大勢の神官と民衆が集ってその若者に死刑を云い渡した。死刑は夜間に執行され，全員の前で，壁に敲をつけられ，頭を棍棒で割られ，死体はただちに焼かれた。[18] 大神殿の背後には女性だけの広間が別にあり，彼女らは自分たちが立てた誓約によって神殿に仕え

る身であった。大部分は未婚の女性で，神殿で用いる装束を作るために糸をつむぎ，布を織って，染めたり，刺繍を施すなどの仕事を行い，大祭では優雅な舞を舞うこともあった。彼女らはキリスト教の修道女に当るもので，神殿生活に入ると髪を切り落され，断食を行い，夜寝る時も一部屋に寝て，もし男と通じていることがみつかれば調べた上で２人とも死刑になった。日本では形の上では巫女（みこ）さんに当るであろう。

(8) インカの「ハトゥン・ライミの生贄[19]」

シエナ・デ・レオンが盛大な多くの供犠の中から特に有名なものとしてハトゥン・ライミを特記しているのでみることにする。

この祭は８月末，トウモロコシ・ジャガイモ・キヌア・オカなど彼等の作物の収穫が終った後に行われる。シトウアの祭典と呼ぶこともあるが，これはハトゥン・ライミのうちの初日についての呼称である。ハトゥンとは最大とか最重要のという意味であり，ライミとは夏至・冬至のことを意味であるが，この２語を併せたハトゥン・ライミは大祭の意味でもあり，祭そのものも非常に厳粛なものであった。というのも天と地の創造神であるティシピラコチヤと太陽・月及びその他の神々に，豊作を与えてくれることを祈願し，感謝することにあり，そのために人々は10日ないし12日間の禁欲生活を守らねばならなかった。初日にはサンコとヤワル・サンコ（とうもろこしの粉で作った団子）を食べ，２日目は，創造主と太陽と雷に捧げられ，その日のために生贄が捧げられた。第４日目は月と大地のためのものであり，習慣に従って生贄が捧げられ祈りがなされた。

生贄には多数の子羊・羊・鳩・クイ（モルモット）その他の鳥獣がクスコに連れてこられ殺された。家畜の頸が切られ，その血が，神々の像や彫像及び神殿の扉などに塗られ，臓物がそれらの場所に吊るされた。占い師や易者が肺の中のしるしを見て占った。供犠が終ると大神官が神官を従えて太陽の神殿に行き，そこから大クスコ市の人々に犠牲として殺された家畜や鳥類がふるまわれチチャ酒が出された。広場の真中には玉座が設けられその上にはティシピラコチャの偶像が置かれ，創造者の至高の神と信じられていたから，すべての神官及びインカも首長とともにはきものを脱ぎ，モチャの礼をささげた。（ムチュチャとも云う。礼拝の意味で神の加護を求めるときワカまたは崇拝の対象（太陽・インカなど）に向って，はきものをぬぎ，頭をさげて両手を開いてから，強く呼吸し，最後に眉毛またはまつ毛を抜いて，ワカの方に向って吹きとばすこと）。なお，この月にシトウアというこの祭りがおこなわれた理由は，この時期に雨期がはじまり，たくさんの病気が発生するため，クスコ及びインカに征服されたすべての土地の人々が病気にかからないよう

にと創造主に祈願するためである。

(9) インカのカパコチャの祭と生贄[20]

1995年にペルーの標高6310mのアンパト山頂付近の高地聖域と一般にいわれている，氷塊の中から500年の眠りについていた，後に「フワニータ」と名づけられている12～14才の少女のミイラが，「高地の聖域」プロジェクトの共同研究者のヨハン・ラインハルトによって，他の3体のミイラとともに発見された。前述の「高地の聖域」で冷凍された状況のミイラで発見されるまでの経緯について，サンタ・マリア・カトリック大学のホセ・アントニオ・チャベス・チャベス氏は次のように推察している。即ち，王都クスコか或はリマに次ぐ第2の都市アレキバの町で生れた12才～14才の少女ファニータは，幼い時から神に捧げられる身に選ばれ，特別な場所で養育されていたが，4年～7年に一度行われるインカの大祭，カパコチャの祭りに生贄にされる身となり，インカ帝国の4つの地区の代表の1人としてクスコの広場につく。ここではインカ王のミイラが持出されており，特別に用意された食べ物・飲み物・織物・土器・金属の飾り，木製の彫り物などが，白いリャマ100匹の生贄とともに供えられている。4人の代表の1人ファニータはここでインカ王に抱きしめられ，子供の美しさ，若さ・健康がインカ王に吸い取られる。インカ王はそれによって天の神に近づき，ささげられた子供は晴れ着をきせられ，特別の飾りや衣裳をつけられ，沿道の白装束の子供達の見送りをうけながらアンパト山まで送られ，山頂で頭部を一撃され，頭蓋骨脳髄損傷により死を迎える。遺体はアルパカとピクーニャの布に包まれ，金属のイリヤという動物の形の小像，ウミギク貝とともに安置されたろうといわれている。

2．祭祀以外の生贄

(1) 挨拶としての生贄

トラテロルコの無名のインディオの著者により1528年にアルファベットを用いてナワトル語で編纂された『はるか悠久の昔にはじまるトラテロルコの歴史』[21]の『トラテロルコ編年史』と通称で知られている冒頭には，スペイン人がテクパントラヤカクに現われたとき，クェトラストラン人が出迎えに赴き，1つは黄色の，もう1つは白色の，もう1つは白色の黄金の太陽，背中につける鏡，黄金の椀，黄金の壷の形をした帽子，ケツァルの羽毛飾りをつけた儀式用の甲冑，貝がちりばめられた盾がカピタンに贈られ，カピタンの前に，生贄が献上された。『トラテロルコ編年史』では「一の葦」の年となっているが，(注) では『フィレンツェの絵文書』の写本がマトラクシウイトル：〈10年〉と記されて

いることをもとに1509年のことと位置づけられている。このことがアステカ社会にあっては生贄がはじめての人を出迎える挨拶として用いられていたことを明白に物語っている。その結果については『トラテロルコ編年史』（以下『編年史』と略称）は「カピタンの前に，生贄が献上された。すると彼は腹を立てた。〈鷲―の―瓢箪〉に入れた血がカピタンに捧げられると，この時，彼に血を献上した者はその理由で殺された。彼が剣で突き殺したのである。」[22] 『フィレンツェ文書』は一般的には『編年史』より具体的であり，詳細に記述がなされているが，この最初にカピタンに生贄が献上された状況の記事はなぜか対応する記事が見出せない。この中のクェトラストラン人とはクェトラシュトラン（現コスタトラ）の地方長官ピノトル自身が，いわば職業柄，異国船がやって来たことをモテクソーマに報告に行き，その結果，ピノトル地方長官は相手方（スペイン人）の内偵をかねて，献上品を差出しに行ったわけで，それはモテクソーマ用にのみ作られた品物であり，モテクソーマ自身，スペイン人がアステカの主君ケツァルコアトルその人であると信じきっていたからである。この点については『編年史』も『フィレンツェ文書』も同じであるが，『フィレンツェ文書』では，これにスペイン人の船に近づくと，船首のところで，挨拶として〈土―食い〉のしぐさをしたとある。〈土―食い〉とはメシーカ人の間で用いられる儀礼で，地面に指をつき，ついでその指を唇または舌にもっていくしぐさである。[23] 生贄は〈土―食い〉に次ぐ敬意を表する挨拶ということができる。

大王トゥパク・インカ・ユパンキが死んで，グアイナ・カパックが第12代のインカの王位についた。或時，王は兵をひきいてハウハの盆地についた時，王に従う首長たちの間で，盆地の畑の境界線をめぐっての対立があることを知った。王はピルカスでやったように生贄を捧げると首長のアラヤ・クシチュカ・グアカロパ等に集合を命じ，三人の間で耕地を今日そうなっているように平等に分け与えた。このこともはじめに生贄をささげる一種の挨拶とみることができる。

(2) 成功祈願としての生贄

『フィレンツェ文書』の中で最も自然を擬人化して考えた物語は第66章のモテクソーマが皮剥ぎの生贄のための最も大きな石を探し求め，これをメヒコに運搬する際に起ったできごとに関することである。生贄用の皮剥ぎの丸い石を運ぶことになった。王は石の前で生贄・供物・祈りをささげ，それでも足りぬと多数の奴隷を生贄に処した。[24] この間にとったモテクソーマの措置は次のようである。神殿のすべての祭司をつかわして，神の神秘ゆえに出現した神聖な事物であるかのように祭司たちに儀式用の衣裳をまとわせ，石全

体に紙をおおい，香をふりかけ，ウズラを生贄にささげてその血を石の上にばらまき，歌い手たちに歌をうたわせた。その運搬作業の中で石のなかから，「私はメヒコに行きたくない，行って滅亡と軽蔑を知るだけだ」という石の声が聞えてきたということをモテクソーマは信ぜず，新しい生贄をささげ供物をささげて石の憤怒を鎮めようとしたわけである。結果は成功しなかったが生贄が成功祈願になされた例で，わが国の人柱伝説に当ろう。

(3) 労をねぎらうための生贄

アステカ王モテクソーマの使者が，スペイン人に会ってメヒコに戻ってきて，自分たちが見たことをモテクソーマに報告に行った時，「使者たちがこのうえない恐ろしい場所から戻ってきたこと，モテクソーマが信じている神＝スペイン人に会いに行き，その真正面からその顔や表情を見つめてき」，「しかも神々とことばさえ交わしてきた」労をねぎらうために，モテクソーマは戦いで捕虜にしたものを２人ばかり白塗りにしておくように命令し，使者の前で殺され，その胸が切り開かれ，その血が使者たちに振りかけられた。[25] 人身御供となる犠牲者は，礼拝する神を擬人化するように飾りたてられ，身体に色塗りされるのが通例で，この場合，白石灰が塗られたのである。[26] 白色がここでは明け方の薄明りの象徴で，その時刻，蘇った戦士が太陽に向かって飛び立つと結びつけているが，東洋では伝統的な白色崇拝の信仰があり，共通するものがあると考えられる。[27]

(4) スペイン人の捕虜の生贄

通常戦斗捕虜はあらゆる生贄に供されるがアステカの場合にはスペイン人は特別にあつかわれたようである。一般的には戦斗捕虜の場合には処罰，処刑なのか生贄なのかの区別がむずかしいが，ここではそれぞれの記録者が既にその判断を行っているものとして扱うことにする。翻訳技術上の問題での生贄か，犠牲か，もこれと同様な扱いとする。

スペイン人を捕虜にし生贄にする記録は『フィレンツェ文書』では第34章と第35章にみられる。[28] 前者はトラスカラ人・アコルワカン人・チャルコ人の原地住民の応援を得てスペイン人がテスココ湖にかかる堤道と湖上制海権をめぐる争いを展開し，メシーナ側が14人のスペイン人を捕虜とし，ただちに奴隷として捕虜を生贄にしたとあるが，その具体的な扱いについてはふれていない。35章では応援のトラスカラ人・テスココ人・チャルコ人・ショチミルコ人の捕虜を含めて53名であった。すぐにヤカコルコまで連れていかれ，横一列に並ばされ，ひとりずつ生贄台まで登っていって，そこで生贄にされた。スペイン人・同盟軍の順になされ，生贄がすむと，スペイン人の首は横木に串刺しにされた。メシーカ人は馬の頭もそうした。高い所にスペイン人の首，低い方に馬の頭が架けられた。

スペイン人以外の者にたいしては，たとえそれが遠方の部族国の者であってもその首は串刺に並べることはなかった。メシーカ人が捕虜にした者はスペイン人53人，馬４頭であった。[29]

(5) 卑劣漢（裏切者）の生贄

スペイン人の侵攻が進みアステカの首都メヒコをめぐる攻防がはげしさを増してきた時，ショチミルコ・クィトラワク・ミスキク・コルワカン・メシカツィンゴ・イッタパラパンの住民が使者を送って来て，危機にある都への支援を申出た。アステカ王クァウテモクは応諾しスペイン人との交戦と女・子供・老人の撤退に加勢することになった。ところがショチミルコ人が裏切って掠奪行為を行った。メシカ人は怒り，ショチミルコ人に向って出撃したので一掃された。ショチミルコ・クィトラワクその他の住民のうちで捕虜にしたものはただちにヤカコルコまで連行されアステカ王クァウテモク及びクィトラワク王のマイエワツィンの前でクァウテモクの要求によりマイエワツィンは家来４人を含めて彼らを殺した。クァウテモクもまた家来４人を殺した。次いで「捕虜となっている者はすべてみみずく―人間の神殿内のいたるところで生贄とした。捕えられた者はあらゆるところで生贄としてささげられた。」[30] とある。

3．生贄の様態

アステカ社会における通常の儀式での生贄の様式には次の３つがあげられる。

①用意してあった短刀で胸を切り開き，心臓を剔り出し，神殿の階段のてっぺんから転がり落す。

②火の生贄といわれるもので，神の火刑台で焼き，炎の責め苦を味あわせた後，熰（おき）のなかから，ピクピクしている瀕死の身体を引っ張り出して，胸を切り開き，心臓を剔り出す。

③神殿に連れて行かれ，神殿の近くの大きながっしりとした厚板でできた足場の上の台座の偶像の安置されている神殿の中で串刺しにされ，弓矢で刺しつらぬかれる。

以上の３つの様式は祝祭と生贄の主要なものの中から(6)女神トシの祝祭の記述から取出したもので同時に行われる生贄の格式を示してもいる。[31] それ故，アステカ社会における生贄といえば①である。②は①以外の捕虜に対して適用されたものでメヒコの人々が「火の生贄」と呼んでるものである。③はその他の残りのものに適用された最も残酷な方法で，かつてメシーカ人がコルワカンの戦士に追跡され，生きのびようとして沼地や葦の

間に身を隠した思出に対するものと考えられる。

戦争奴隷の生贄に際しての扱われ方は上述のように殺されることには違いがないにしても，神に捧げるという目的にかなった①の場合と，②の炎の責め苦の後に通常の生贄にされる場合と，③の武器によって虐殺される場合との差異があり，特に後に述べるように火を用いることは異質のものであった。それを象徴するものは次のことである。「一の葦」の年カピタンがテクパントラヤカクに現われ，クエトラストラン人が贈物をもって出迎える。カピタンは〈太陽〉とあだ名されたドン・ペドロ・アルバラードをあとに残して海岸へ戻る。〈太陽〉はモテクソーマとトラテロルコの将軍イツクアウツィンを縄で縛り，スペイン人は，アコルワカンの首長，ネサワルケンツィンを湖畔のほとりにある城壁の近くで吊し首にし，ナウトランの領主コワルポポカツィンの身体に矢を射込み，矢を突き刺してから生きながら焼き殺した。同じ頃の市場の攻防が続いていた頃，クアウテモクは捕虜を連れて来るよう命じ，大神官と隊長が両側から捕虜を引っ張り，クアウテモク自身の手で捕虜の腹を切り開いたのである。[32] 筆者は前稿において，ヨーロッパのケルト民族に火を用いて焼き殺すという生贄が伝統的になされていたことを述べたが，火に対する価値観がここでも表われていると考える。[33]

ヨーロッパの地中海文化圏での戦争捕虜が直に奴隷につながったことは周知の通りである。アステカ社会では戦争捕虜は生贄のためであり，トラコトリ（平民）が生贄にされることは特別な場合であるといわれている。アステカ社会においてトラコトリと奴隷との関係を示すのが税においてである。税が払えないと奴隷を80日目ごとに何人連れてくるようにと強く申し渡された。[34] 原住民は自分たちの奴隷が底をつくと今度は息子やマセワールを連れてくるようになったという。マセワールはナワ語で，「神々の犠牲による恵みにあずかった存在」つまり「人間」を意味した。ケルト民族の生贄をされる資格条件と全く同じであることは興味あることであるが，ケルト民族にあっては奴隷が生贄から外されるのに対してアステカでは専ら生贄にされる点で対照的である。

次に指摘しておきたいことは火との関係についてである。

テオティワカンの繁栄が推定されたにもかかわらず，9世紀の中頃（注 19）では7世紀中頃から9世紀中頃と研究者によって幅がある）突然テオティワカンの祭祀センターの崩壊と放棄が，マヤ世界のウァシャクトゥン・ティカル・ヤムラン・ボナンパック・パレンケなどの巨大な祭祀センターの崩壊・放棄と同時代に起るという事態が発生したことである。また，これが住民の一部の離散を伴うことである。離散した住民の一部の移転先は

現在のメキシコ市の北方70kmのトゥーラ（当時の呼称はトラン）であったといわれ，このことはトゥーランシンゴに隣接のウァパルカルコの祭祀センターで発見されたテオティワカン人の居住跡であることが考古学の発掘結果から推定されているが，彼等はそこからまたすぐにトランに移ったと伝承されている。トランに移っても崩壊前のナワトル文化ともとのラオティワカンに発生し，発達したケツァルコアトル信仰は保たれていたといわれている。このところの生贄をめぐる文化を解くカギはスペイン人やインディオの記録を行ったものがトルテカ族と呼んでいる部族に関係があるように思われる。トルテカ族はアステカ族とともにナワトル語を話し，またともにケツアルコアトルを唯一の神と崇めている部族であった。ここで注目すべきはトルテカ族は，生贄をきらうなど平和愛好者としての特徴をもっていたということであり，トルテカ族のケツアルコアトル神官は生贄のような他の宗教儀式を取入れようとしたものたちと何回も戦わなければならなかったことをあげ，しかも彼の一の葦と呼ばれた年，「ウエマツクが統治したとき，生贄のすべてが始まり，其の後習わしとなった」その始源について，「それを始めたのは妖術師たちであった」と「クアウティトラン年代記」は記している。[35] この年代記によれば，「トゥーラの最後の王ウエマツクは1064年トゥーラを放棄し，チャプルペックへ流れていき，そこで1070年自殺したことになっている。[36] 11世紀半ばのこのような，いわば都市建設と宗教争いの中で，ケツアルコアトルが赤色の地に茶毘の地に身を置くために海で舟出したという口伝がある。当時の情勢としてはトルテカ族はナワトル語やオトミ語を話す部族を含む北方の放浪民と交わりながらメヒコ盆地のテスココ湖岸のクルワカンに都市建設をしようとしていた時のことであったことを思えば，アステカ族は後にのべるように本来は火・火葬とは縁遠い部族であったが，トルテカ族は彼等との交流の中で，火葬の風習にも影響されるところがあったのではないか。茶毘が示す文化の違いが生贄と異ったものであることを指摘しておきたい。

4．神話伝承と生贄

生贄に関連させて見るとき，アステカの神話は２つの物語からできているとみることができる。プロトタイプの創生神話[37]と二次的なタイプの民族神話[38]である。前者ではメキシコ人によって〈太陽〉と呼ばれる各時代には人類や動物・植物の形態がしだいに改良された〈螺旋状〉の進化がみられ，水・土・火・風の４元素が動きの太陽と呼ばれる第５期に達するまで，各時代（各太陽）を支配した。最初の人類は灰からつくられた。しか

し，水が彼らを滅ぼし魚に変えた。第２番目の人類として巨人がつくられた。大きな体に似合わず実際はひ弱であった。インディオの言葉によれば，何かの事故で一度倒れると，ずっと倒れたままであった。第３番目は火の時代に存在した人類で，七面鳥に変身させられるという悲しい結末を迎えた。最後に，第４番目の人類に関しては天変地異がこの時代を終らせ，この回の人類は，魚や七面鳥には変身せず，トラカオソマティン（猿人）と呼ばれるものに変身して山間に住みついた。現在私たちが生きている第５番目の時代はテオティワカンから始まり，〈われらの王子ケツアルコアトル〉とともに偉大なトルテカ族を出現したといわれている。それぞれの時代（太陽）は必ず天変地異で終り，前時代と同じ歴史を再び繰り返すことをせずに新しい周期は螺旋状に上昇し，前よりも改良された形が生れてくる。創生神話につづいての民族神話としては次のように語られている。

古代メキシコの知恵を象徴するためなすことは，生きている間に，このはかない人間を見出してくれる最高本源トロケ・ナワケ（近隣の主）を求めることであったが，アステカ族が，この第５の時代を滅ぼすと予告された天変地異によって，死ぬことを避けるには，トラカエレルの思想を守って，「人間を生かす大切な液体に秘められたエネルギーを提供すれば，ウィツィロポチトリ＝太陽神の活力は強まると考えた。この貴重な液チャル・チウァトルとは血液のことで，生贄の数を増やし，その心臓と血をウィツィロポチトリ＝太陽神に捧げれば，その生命を永遠に養うことができる」というのである。トラカェレルは，太陽の生命を支える生贄を絶やさないようにするため，アステカ族に〈花の戦争〉をするように勧め，アステカはテスココと，それから傀儡国家とも呼べるようなトラコパン（タクバ）の２つの国と恒久同盟を結び，これらの三国は同じナワ語族が支配するトラスカラやウェショツィンコの国々と定期的に組織した生贄に使う犠牲者を手に入れるための戦をするようにしたのである。こうしてアステカ族の彼らが生きている時代（太陽）を滅ぼしてしまうところの天変地異を避けるための太陽に選ばれた民という選民意識が作られたのである。また，ここで太陽の生命を守るという使命観に支えられた選民意識が宗教観として成立することになる。アステカの旧・新の神話は以上のように整理することができる。ただ，この神話では，ナワトル世界の生贄の祖型ともいうべきテクシステカトルとナナワツィンの２人の神の生贄失敗と成功により月と太陽形成，唯一神ケツァルコアトルの犠牲により骨捜しに成功し，それに生殖器からの血を流しかけて人類の祖ができたことが省略されている。しかし，上述のことが示すように生贄の風習はアステカ社会の時代よりかなり以前から行われていたことを物語っている。

5．アステカ型生贄の成立

古代においては，民族・部族の移動に伴う流浪の民の物語はつきものであり，アステカ族も例外ではない。前述のアステカ型ともいえる生贄の成立もこの流浪と争いの中の産物である。9世紀の中頃，謎の崩壊をもたらすテオティワカン，トルテカ族の首都，トゥーラの時代につづいて，クルワカンを経て1325年テノチティトランに到着し，1426年には現在のメキシコ市のメヒコ＝ティノチテトランの小島を本拠とする時代を迎える。この頃アカマピチトリがアステカ初代の王となる。宗主国であり，隣接のアスカポツァルコ王テソソモクが死んで暴君として知られる息子のマシストラツィンが王座についていた頃，アステカは第4代の王としてイツコアトルを選んだので，暴君テパネカ族のマシュトラの脅迫に立向かわねばならない危機にあっていた。イッコアトル王は甥のトラカエレルを重臣として用い，政治・社会・歴史・宗教の面で改革の必要にせまられた。そこで，宗教の面での思想改革のためにアステカ族を征服した民族・部族がもっていた絵文書と共に，アステカ（メシーカ族）自身のものまで焼き捨てる，いわゆる焚書を行わねばならなかった。宗教にあっては当時のトルテカ時代の創造神にアステカの古い部族神を同等に位置づけることであった。ナワトルの宇宙創造に対する考え方については基本的に異るところがなく，第5の太陽（時代）の太陽も前の4つの太陽に起ったように，いつかは尽きねばならなかった。この宇宙の最後がアステカ族の新しい宗教・軍事観の前提となった。アステカの生贄として人の血をささげることと，これを徹底させる選民意識と，その具体策である「花の戦争」が強化・推進されるのはそのためであった。この生贄のやり方が今日アステカの生贄として伝えられるのは，伝統的な文化として一貫して一様に伝えられたものではなく，秦の始皇帝の焚書と同様な方策による精神主義的な徹底した増幅強化がなされたことにあること，また，最初に述べたように，これを実際に見聞・記録した者が，文化的に対照的な側の者であったこと，があげられなければならない条件である。[39]

むすび

古代はいづれの国も呪術横行の社会であった。それは同時に吉兆占いの時代でもあった。ただ，中南米ではそれがずれ込んで歴史の舞台に登場することになった。その結果「はじめに」で述べたように古い在来宗教が西欧の新しい宗教と直接に対決することになり，在来宗教の象徴である生贄が新しいキリスト教と相容れない場面を生むことになるのである。第5番目の天変地異を迎えているという一種の終末観（一種の末法思想）の危機意識に支

えられて強化された生贄の思想はトラカエレルらによってアステカを中心に発展し，この儀礼がもとで当初から険悪な空気に包まれることとなるのである。

ただ，ここで指摘しておきたいことは前稿でも指摘したように，ケルト民族が同じ生贄であっても火を用いる方法の，いわば bloodless の様式をとる系統に対して，日本の仏教以前及び中国は blood の様式の系統であり，アステカなど中南米は後者に属するものである。[40] アジアでも仏教文化と共に焼身，火葬が入ってくることは注目すべきことである。この点については中国の検討をふまえて稿を改めることにしたい。

注（直接文章の上で関係するところにとどめた。）

1）ミゲル・レオン＝ポルティーヤ，山崎真次訳（1985），『古代のメキシコ人』早稲田大学出版部 p.47.
2）前掲　1）p.47.
3）前掲　1）pp.47～48.
4）シエサ・デ・レオン，増田義郎訳・注（1994）『インカ帝国史』，岩波書店　pp.332～335.
5）前掲　4）p.336.
6）前掲　4）p.268.
7）拙稿（2003）「ケルト民族と日本民族との類同性に関する一考察―イキニエをめぐる予察―」高松大学紀要　第39号。
8）(1) モトリニーア，小林一宏訳・注（1993第２次）『ヌエバ・エスパーニャ布教史』，岩波書店
(2) 『フィレンツェの絵文書』第一二の書　G・ボド／T・トドロフ編　菊地良夫／大谷尚文訳（1994）『アステカ帝国滅亡記―インディオによる物語』　法政大学出版局所収
(3) 『トラテロルコ編年史』　同上所収
(4) 『ヌエバ・エスパーニャのインディアス史および大陸付属諸島史』　同上所収
9）注８）―(1) pp.87～95.
10）注８）―(1) pp.97～102.
11）注８）―(1) pp.103～111.
12）注８）―(1) pp.112～115.
13）注８）―(1) pp.127～133, (1) pp.134～137.
14）注８）―(4) pp.372～378, p.619　注(5).
15）注８）―(1) pp.32～33, (1) p.59.
16）Mircea Eliada ed. chief, The Encyclopedia of Religion (1987) vol.12, Alfred Bloom. p.546.
17）注８）―(1) p.122.
18）注８）―(1) pp.122～123.
19）シェサ・デ・レオン『インカ帝国史』　増田義郎　訳・注　1994　第２次　岩波書店　pp.147～153.
20）ホセ・アントニオ・チャベス・チャベス（1999).「聖なる眠りから目覚めた少女フワニータ」，ペルー国立人類考古学博物館／アンデス聖地博物館所蔵『悠久の大インカ展―哀しみの美少女フワニータ―』所収
注４）　pp.143～146.

21) 注８）—(3) pp.221～245.
22) 注８）—(3) p.221.
23) 注８）—(2) p.73, p.589　注(12).
24) 注８）—(2) pp.410～411.
25) 注８）—(2) p.86.
26) 注８）—(2) p.592　(注) 29.
27) 鉄井慶紀 (1990)，「中国古代における白色崇拝について」，池田末利編『中国神話の文化人類学的研究』，平川出版。
28) 注８）—(2) pp.182～189.
29) 注８）—(2) のフィレンツェ文書　第35章のメシーカ人の捕獲したスペイン人の53人は文意が合わないところがあるが，指摘だけにとどめる。
30) 注８）—(2) p.181.
31) １．祭祀と生贄　(6) 参照.
32) 注８）—(3) p.237.
33) 前掲　注７　p.44.
34) 注８）—(1) p.52.および同注(24)
35) 注１）　p.38.　なお，アンデスの原住民の間での生贄の儀礼が書かれているものとして，細谷広美『アンデスの宗教的世界』のワマ＝（山の神）へのパゴ（儀礼）をポンゴと呼ばれる呪術師が，現在でも深くかかわっているとのべられていることは極めて示唆的であることを指摘したい。
36) 注(1)　p.41.　この自殺の原因については述べられていないが，トゥーラの放棄・流浪・自殺の過程を考えると生贄を含めて宗教上の対立があったことが考えられる。
37) 注(1)　pp. 2 ～ 9 など。
38) 注(1)　pp.10～28.
39) トラカエレルについては
　注１）　特に「太陽の百年」（「トラカエレルの改革」）pp.125～137.
　花戦争については
　注８）—(1) 小林一宏「花戦争」（pp.618～620.）に詳しい。
40) 注(16)の用字上の分け方によったが，内容は全く異っており，blood, bloodless　を火を用いる生贄と火を用いない生身の文字通りの生贄とに分つ考えであるが，ここでは詳述しない。